日本近代における経営者と美術コレクションの成立

――益田孝と柏木貨一郎――

山口昌男

益田鈍翁の生涯は白崎秀雄『鈍翁・益田孝』（上・下、文春文庫）をはじめとして幾通りかの叙述がある。年表もしかりであるが、ここでは柏木貨一郎と関係する部分に注目する。その参考のためにコレクター鈍翁に至る道を探ってみよう。

一八四八年（嘉永元）〔十月十七日〕佐渡相川で益田鷹之助、らくの長男、徳之進として生まれた。

一八五二年（嘉永五）〔一月五日〕次弟荘作（克徳）生まれる。

一八五四年（嘉永七）〔七月〕佐州益田鷹之助（父）が箱館奉行支配調べ役を命じられる。鷹之助は江戸から箱館へ、家族は江戸へ向う。

一八五五年（安政二）この年頃から、祖母ちえ、母、徳之進、荘作の家族四人で箱館へ向ったものと思われる。（益

田と北海道のかかわりを示す事実である。）

一八五九年（安政六）この頃から、箱館奉行所の教育所で徳之進は四書五経を習い、課程外で英語を名村八五郎に習う。（後の孝の英語を駆使しての働きを見ると、この記述の重要さがよくわかる。更に当時国際都市としての箱館の雰囲気を味わいながら育った筈である。）

一八五九年（安政六）〔三月―〕徳之進（孝）幕府遣欧使節の一員（父の従者、益田進という偽名）として十二月二十九日横浜帰道。

一八六四年（元治元）〔三月三日〕パリ到着。七月十八日横浜帰着。

一八六五年（慶応元）〔三月三日〕末弟英作生まれる（後に趣味人、骨董鑑定家として知られる）。

同年〔六月十三日〕徳之進（孝）、小十八格、騎兵指図頭並取勤方を命じられる。

一八六八年（明治元）〔九月六日〕庄内藩がウォルシュ・ホール商会（亜米一）の益田徳之進に汽車買付のための尽力を要請。のち、十一月三十日付けで庄内藩郡代が益田徳之進（孝）様宛に礼状と贈答品を送る。

同年〔十二月三日〕荘作慶応義塾に入る。

一八七〇年（明治三）〔二月〕横浜回漕会社頭を命じたばかりの中屋徳兵衛（益田徳之進（孝）の商人名前）ら三人の頭取が、海上保険会社設立のため三十万両の貸下げ（「回漕懸り御役人衆中」へ申請（未許可））。

同年〔十月十六日〕中屋徳兵衛（孝）は高島嘉右衛門らとガス灯会社設立許可を神奈川県に申請（結果は不許可）。

同年〔五月十日〕この月、現在の横浜商人名簿の弁天池通、二丁目の項に、「中屋徳兵衛　雑貨売込」とある。（重商主義の孝の方向が既に父の経歴の中に現れている。高島は高島暦で有名になったが学校を創建する他多面的な活

動を明治初期に行っていた。）

一八七一年（明治四）〔一月二十五日〕『横浜毎日新聞』に中屋徳兵衛が英語塾の広告をのせる。

同年〔六月十日〕『横浜毎日新聞』に洋文翻訳書の広告。

同年〔十二月二日〕フランス領事帰国のための家具・牛など売却の広告。孝が旧幕府で英語通辞を行っていたことを考えるとその行為に一貫性があった。『横浜毎日新聞』は旧幕臣大岡育造が発行、印刷はこれまた旧幕臣で騎兵隊の一人であった佐久間貞一の秀英舎で印刷されていた。

一八七二年（明治五）〔三月二十八日〕徳之進、井上馨にスカウトされ、大蔵省四等出仕を命じられる（大阪の造幣寮勤務）。まもなく孝と改名。

一八七三年（明治六）〔八月八日〕孝、井上馨に同調して造幣局権頭を辞任。

一八七四年（明治七）先収会社成立、総裁井上馨、社長岡田平蔵、頭取益田孝。

一八七五年（明治八）〔九月二十五日〕太郎誕生、戸籍には長男として届け（実の長男象は夭折）。

一八八一年（明治十四）〔四月二十三日〕孝、茶会を開く（現在確認できるもっとも早い、孝の茶会）。この年、三井物産の業績不良。赤字決算。

一八八四年（明治十七）〔六月十日〕孝、農商務省から東京商業学校（のちの一橋大学）商議委員を委嘱される。孝の妻えいの兄矢野二郎は七月十五日、校長の職に復帰する。

一八八五年（明治十八）〔八月五日〕孝とタキとの間に吉田信世誕生。この年、七月頃新座敷完成（のちの禅居庵）。

一八八七年（明治二十）〔三月五日〕孝夫妻は前日に乗船し、この日横浜を出港、欧米実業視察へ。十一月八日帰国。

一八八八年（明治二十一）〔三月―〕応挙館完工。
同年〔八月十八日〕三井組が、官営三池鉱山を四百五十五万五千円で落札。
一八八九年（明治二十二）〔十一月十一日〕孝が、三井同族、克徳、古筆了仲を招いて茶会。宮島釜、牧渓蜆子和尚図、青磁鳳凰耳花入などを使用。
一八九〇年（明治二十三）〔十月一日〕孝、三井物産社長辞任を表明。この後、三井家政改革本格化。
一八九一年（明治二十四）〔八月十二日〕中上川彦次郎、三井銀行へ入行。
一八九二年（明治二十五）〔四月二十六日〕三井物産役員刷新。孝は取締役に退く。
一八九三年（明治二十六）〔七月一日〕商法一部施行。これに伴い三井物産は合名会社に改組。孝は八月一日に三井物産合名会社理事に就任。
一八九四年（明治二十七）〔十月九日〕日清戦争勃発をうけ、孝は三井物産専務理事に就任。
同年〔十一月十五日〕母らく死去。
一八九五年（明治二十八）〔五月十九日〕克徳、保険業務視察のため、横浜から欧米へ出立。帰途、カルカッタで「益田間道」を購入し年内に帰国。この年の夏秋の交、品川御殿山に一大吉利あり（孝が弘法大師の書入手）との情報飛ぶ。
一八九六年（明治二十九）〔三月二十一日〕御殿山碧雲台で第一回大師会開催。孝、大師筆崔子玉座右銘を展示。
同年〔五月―〕東京の星岡茶寮で渡辺驥入札会。孝は清拙墨跡（平心）入手（この墨跡にちなみ、のちに新座敷を禅居庵と命名）。

一八九七年（明治三十）〔三月二十一日〕第二回大師会（碧雲台）。
一八九八年（明治三十一）〔三月二十日〕第三回大師会（碧雲台）で、孝、地獄草紙一巻（沙門地獄草紙）を展示。
同年〔七月十五日〕孝は、吉田信世を認知して、この日、益田孝家の戸籍に入れ、同日中に、益田孝家から益田信世家を分家。のち、この益田信世の戸籍に母の吉田タキが入り、益田タキとなる。
同年〔九月六日〕柏木貨一郎死去。

古美術蒐集家、古代史家――柏木貨一郎

益田孝の年表にその死が書き込まれている柏木貨一郎とは何者か。ふつうの人名辞典にその名は現われない。

柏木は旧幕臣である。木下直之氏の御教示によると、名のうち貨は、彼が貨幣の歴史に入れあげていたから名乗ったものと言うことである。多分守田宝丹などと並ぶ古銭の大コレクターでもあった。集古会の山中共古とは色々な形で好みを共有していたらしく、息子の名前で集古のメンバーになっていた（林若樹の筆になる「集古会会員名簿」、時期不詳、未刊、筆者蔵）。共古も古銭学知識の面で相通ずるものがあったに違いない。探古という貨一郎の雅号も集古、共古という連想からであった。「集古会」の名誉会員の中にも益田孝、朝吹英二が加わっているところから見るこれらの旧幕臣、非薩長の諸士の間の共感とも云うべきスタンスの共通性があったに違いない。

明治の三井の大番頭であった益田孝の伝記をたどっていると、たしかに影の如く佇む不思議な人物の像が浮かび上って来る。私自身もこの人物については鼎軒田口卯吉が編集していた歴史雑誌「史海」（例えば第二十一号、明治二十六年三月号）の久米易堂（邦武）「柏木氏に答え申す」、柏木貨一郎「南北人種分界地図に就て落後氏に答ふ」

（五―十一頁、コロボックル論）、史海子「史海乱麻の如し」（同号、『久米柏木両人の埼玉の津の喧嘩』という当時の四つの論争の一つに挙げられている事実）、鼎軒「久米柏木両氏の討論に就て」（同号、久米・柏木の〝埼玉の津〟論争についての発言）、柏木「聖徳太子御降誕並御享年」（同号）、田口「柏木大人に対して」（同号、柏木の〝聖徳太子没年について〟の論評）などの形で一号の中で様々の形で論争にかかわっていることで薄々知っていた。因みに「史海」は田口鼎軒卯吉が社主だった経済雑誌社の発行になる雑誌であった。田口が旧幕臣であったことは筆者も別のところ（雑誌『群像』）で論じたことがあるし、『田口卯吉と東京経済雑誌』（日本経済評論社、一九九五）にも触れられているから再論は避けよう。田口卯吉の「日本開化小史」は岩波文庫版もある。しかしながら、「経済雑誌社」の版には中根淑というれっきとした旧幕臣（小著『敗者の精神史』岩波書店、一九九六年参照）が跋文を書いて居り、この本の印刷所は、これ又旧幕臣であった佐久間貞一の経営になる秀英舎であったことが、旧幕臣コネクションが依然として健在であったことを雄弁に示している。

私の見るところでは一八八六年（明治元）十一月田口卯吉が旧幕臣飯岡金次方に身を寄せてその骨董品などの整理を手伝っていた（「田口卯吉と東京経済雑誌」）。柏木貨一郎はこの整理にかかわっていたのではないかということになる。

コロボックル論争を点火した坪井正五郎は東京帝国大学に「人類学教室」を開設した人物であった。コロボックル説は坪井と共に「集古会」を始めた山中笑（共古）も反対の論を唱えたこともあって坪井の最後の論争としてはやや物足りない結末を迎えた。坪井は経歴の絶頂期、大正二年に国際学会に出席のため聖ペテルブルグに滞在中、急性肺炎のため他界した（柏木と坪井の関係は、木下直之氏の「坪井正五郎」（講談社新書近刊予定）に詳細に論

じられる筈である)。

柏木が生涯を通じて鈍翁の骨董趣味の助言者として近いところにいたかを示す材料として、益田鈍翁筆『風流記事』(筒井紘一、柴田桂作、鈴木皓詞著、淡交社、平成四年)という書物がある。この書物の序文に当る「鈍翁と茶道――『風流記事』と『茶智くらべ』を中心に」の中で著者は次のように柏木貨一郎の役割について書く。

孝より四歳年下の益田克徳が宗偏流吉田時習軒のもとで茶を稽古するようになった。明治九年のことであった。克徳はその後、根岸の別荘に無為庵、止点庵という茶席を構えた。これらの茶室は柏木貨一郎の手になるものであったと筒井紘一氏は推定する。

筒井氏は柏木が克徳の紹介で鈍翁に会ったと述べる。明治十三年のことであった。柏木は古美術蒐集にも力を入れ、古筆や大和絵にも通じていた。又古代史家としても知られる存在であった。古代史研究が実証主義を振りかざして分業化し大学に安住する以前の集古家であったと云えよう。そこで鈍翁は柏木によって古美術開眼したらしい。鈍翁は明治十三年(一八八〇)、三十歳の時、筒井氏によると禅居庵を建てている。この設計も柏木貨一郎(探古)である。

この禅居庵を使って孝が初めて茶事を催した。明治十四年十一月六日ということになっていた。この日の客は安田善次郎、平岡吟舟、富永冬樹であった。

鈍翁は御殿山の本邸碧雲台に奥座敷を増築した明治二十二年(一八八九)はじめて炉を切っている。開炉の初客は孝が三井に誘い入れた朝吹英二である。朝吹は孝とは浅からぬ因縁を結んでいる。

所が「鈍翁の眼」展の目録の解説の中で、著者鈴木邦夫(電機通信大学助教授、経済学専攻)氏は「道具商の伊

丹家に残された記録により同年四月二十三日に田舎家で茶会を開いていたことが判明した」と述べている。

弘法大師会茶会の招待客

兎に角鈍翁における趣味の形成の歴史について述べ出したらきりのないところがある。本稿の目的とするのはあくまでも、益田孝の趣味の形成を助けた柏木貨一郎のことであるから、今は先を急ぎたい。その前に一寸気になることを述べておこう。

というのはここに山中笑（えむ・共古（キョウコ））の名が現われるからである。禅居庵設計柏木貨一郎が孝の父鳳の下谷竹町の隠居宅を設計したと記していると目録の解説を書いた鈴木邦夫氏は云う。山中笑は「集古」（内田魯庵も出品は甚だ少なかったが重要メンバーだった）という旧幕臣色の強い知的集団の指導的存在であると共に下谷メソディスト教会牧師でもあった。孝の父鳳は下谷メソディスト教会に所属していたと鈴木邦夫氏は云うから、山中は益田父子とは極めて近い関係にあったと見てよかろう。ということは探古柏木貨一郎と「集古」会を主催する山中笑は同じ知的圏内に属したと考えていたとも考えられる。

ここに一つの手懸りがある。私の所蔵の文書に「明治二十四年会費未納調査帳」なる文書がある。この中に柏木祐三郎、（住所）下谷区中根岸町七十二という名前（貨一郎の養嗣子）が記されている。

益田孝の茶会覚え書きにもとずく「風流記事」は多層的な記録である。出席者の人脈、各人物の属している文脈、使われた茶具・骨董などの文化史的空間の意味など考えると興趣尽きざるところがある。「風流記事」の記述の中でも招待客に焦点を宛てて追って見よう。

最初に記載されているのは弘法大師法会である。これは大師入定より明治二十九年までの千六十二年を記念してこの年三月二十一日に催されたものである。招待客は次の如くである。上欄に注記者による職業が記入されているのは初心者にとって便利である。次に諾否が記してある。

京橋風月堂　　諾　　大住喜右衛門

小弥太　茶　　〃　　鳥尾得庵子爵

（私注―薩摩出身。陸軍中将であった、旧幕臣中根淑少佐の兵部省における上官（大佐）で中根の「兵要日本地理」の東軍・西軍の語の使用を「官軍」「逆賊」に書き改める事を強要し辞任に導いた人物。後に漢詩をよくする文人として知られる。）

美術評論家　諾　　大内青鸞（ラン）

（宗教家、印刷の旧幕臣佐久間貞一を披護し、仏教雑誌「新教新誌」の印刷を依頼した）

（不詳）　諾　　大谷雄治

（不詳）　諾　　大内友人

大槻修二

（如電と号す。旧仙台藩士、交通史家、博学者、日本芸能史に通じた、盤渓の長男。次男文彦は『大言海』を編した。維新時、仙台藩にて無実の罪で入牢させられた父の罪をはらすために文部省編纂所に入り、明治六年、無実の判決を勝ち取って後、官職と家督を弟、大槻文彦に譲り、その後二度と官職につかなかった。昭和六年没。当日出席せず。鳥尾との同席を潔ぎよしとしなかったのかも知れない）。

郵船二代目社長　○断　浅田正文
〃　三代目　○　近藤康平
政治家　加藤正義
三井　諾　大江　卓
（益田によって骨董の道に入れられる。後に朝日ビールの社長となる。）
三井　〃　馬越恭二
（若い頃福沢諭吉に刺客として接近し、逆に心服し仕え、益田の下で三井に入る。）
実業家　諾　朝吹英二
（益田、渋沢に共に近い実業家。）
実業家　諾　森村市左衛門
書家　諾　中沢彦吉
書家　諾　多田親愛
美術評論家　諾　黒川真頼
美術評論家　諾　小杉椙村
子爵　島田蕃根
美術評論家　野村素介
美術評論家　柏木貨一郎

非　無為庵　益田克徳
（益田孝の弟、茶人）
鈍翁の義兄　諾　富永冬樹
茶人　諾　真盛寺　中山謙治
美術評論家　伊集院兼常　断　岸　光景
三井　上田安三郎　前田謙二郎
三井　団琢磨　断　谷森真男
三井　諾　高橋義雄　断　本盛寺福田
富永友人　書家
新聞　福地源一郎　諾　北岡文平
幹事
鑑定家　梅浦精一　古筆了一
実業家　赤星弥之助　〃　了任
諾　伊集院友人二人　〃　了信
山澄　道　諾　望月　石野力蔵
貝商多田親愛の実弟　茶人　池内就当
茶人　道具商　梅野安蔵

応挙館　広間

一床　長卓　坐右銘巻物

御歌所番人　榎坂町五番地　　坂　正臣

（歌人）

という具合である。鈍翁催した茶会がどのようなものであったかという構成を知るために全てを記載した。この後、廿日夜の項では来客名他、本年移築落成として応挙館広間大師筆　床の間　坐右銘巻　棚　大曼陀羅帖　負櫃大師遺告帖　探幽写、等美術品の外に卓上の香炉、経、法華経、釜、長板、水指、柄立、蓋置、茶入その替火鉢（光琳圖入）、煙草盆蒔絵（圖入）、青磁（砧鳳凰）、火箸、砂張（八角）、筆その他に三十二点が挙げられている。その構成の緻密なこと驚くばかりである。数人の助言者が居たことがわかるが、我々の関心から云って欠席したとは云え大槻如電、福地桜痴と共に柏木貨一郎の名が挙がっていることに注目しておこう。如電も根岸の住人であったから貨一郎及び彼を通して親しく行き来する仲だったのである。如電は明治六年に官を辞して以後、昭和六年に世を去るまで、芸能万般、音曲史において最も傑出した民間学者であった。

益田鈍翁の夫々の茶席の席に連なる人については辞典を作ってもよいくらいの拡がりを持っているが、それは本稿の課題の範囲を越えるものである。その後柏木の出席した茶会だけを摘記すれば次の如くである（気になる他の招待人をも付記する）。

明治三十年三月廿一日（時事新報岡本、小幡、森村市左衛門、町田久成、石黒忠悳、波多野承五郎、末松謙澄、

黒川真頼、安田善二郎、三井源右衛門、蜂須賀侯爵、東久世伯爵、朝吹英二、伊東巳代治、河瀬秀治、大江卓）

明治三十一年一月四日　御殿山年始会

柏木（外の客　馬越、朝吹、山澄）。

一寸本題から外れるが明治三十二年二月十三日には次の如き顔触れの外に書店主のメンバーが見られる。

中上川彦二郎、渋沢栄一、大岡育造、林權助、大山侯、高楠順次郎（国学者）、竹越与三郎。古書店は内田魯庵と親しかった朝倉屋で、博文館主大橋佐平であった。

明治三十三年一月五日　柏木彦兵衛の名が見られるが柏木貨一郎と同一人物なるかは不明。相彦とも書いてある。

明治三十四年三月廿一日　応挙広間における会。（相彦）柏木とある。

同時代でも社会的には殆ど知られず、今日でも知られていない柏木貨一郎の名が見られるのは、柏木が鑑定家として益田孝に最も近い存在だったからであると云えよう。

柏木貨一郎の足跡

大正昭和の金工師そして金工史の権威香取秀真に「道叡山房雑記」（畫説、八号）という一文がある。この中に次のような柏木貨一郎の年譜及びそれをめぐるエピソードが語られている。

昭和八年、香取秀真が療養の為伊豆修善寺温泉に滞在していた折、必要があって三村竹清に探古について教示を乞うたところ三村の方は墓銘誌の写しを送って来た。三村は「集古」会の重要メンバーの一人で、伊勢の民俗に精しかった。「三村竹清著作集」（八巻）が刊行されている。民俗学にかかわった文人の一人であった。この墓銘誌

の年譜は明治七年から始まっているが、それ以前の事情は大川三雄「工匠・柏木貨一郎の経歴とその史的評価について」（「日本建築学会計画系論文集」第四五九号、一九九四年五月所収）に精しい。

大川三雄氏は壽々木雪山に依拠しながら次のように述べている。

天保十二（一八四一）年正月十六日　代々加賀前田家の用達を勤めていた糸物問屋。辻又四郎の第六子として、下谷和泉橋通に生まれた。

安政五年　幕府の大工棟梁柏木因幡の養子となり、因幡隠居の後、柏木家第九世を継ぎ、若狭を称した。（柏木家は幕府作事方でなく、「小普請方」大工棟梁の系統に属したと大川氏は述べている。小普請方は既存の建物の保守修理を主とした。作事方は独自の技術陣を有する組織だった。東照宮の作事には小普請方大工棟梁として柏木日向という人物がかかわっていたという（西和夫『近世大工の系譜』ぺりかん社）。これは私の推測であるが、八王子の千人同心は江戸城の改修と東照宮警護にかかわっていたというから、柏木との間に何らかのかかわりがあったのかも知れない。（宮川鉄次郎「江戸築城について」「あふひ」第一号、明治四三年五月号、二七頁）

慶応四年（明治元年）貨一郎柏木家第九世を継ぐ。家業を失った貨一郎は成島柳北、根岸武香（吉見百穴の近くの素封家、勤皇家で、政治活動にも携り、明治になって貴族院議員にもなっている。坪井正五郎と吉見百穴古墳調査をした関係もあって坪井、山中笑達と共に明治二十九年に「集古」会が東京帝国大学の坪井が属した人類学研究室で発足したとき会長に選ばれる。「新撰大人名辞典」〈平凡社、昭和十三年〉には柏木探古らと交遊があったと特筆される）、守田宝丹（薬屋、古銭家、貨一郎の貨は古銭学に関係すると木下直之氏は個人的な会話で云っている。山中共古も古銭学については数多くのエッセイを書いている）らと交わる。

明治二、三年の足跡についてはよくわかっていない。しかしこの間の貨一郎について、大川氏は「古銭の鑑賞や畫画骨董、音曲、演戯などを楽しむ生活に明け暮れていた」と述べている。日本における国立博物館創立の功労者町田久成と知り合い博物館御用掛になっていたらしくもある。一方、既述の如く横浜で田口卯吉と組んでいたかも知れない推測も立たないことはないが、根拠は薄弱である。この後は、大川氏作成の年表と三村竹清の墓銘に基づいて作製したものである。

明治四年　招魂社で兵部省管轄の建物で行われた大学南校物産局の主催による物産会に「柏木政矩鉱物部門に一点古物部門に九六点」を出品した。

大村益次郎らにより九段坂上三番町通、旧幕府歩兵屯所跡が招魂社の建設用地として定められたのは明治二年六月十二日であった。最初の例祭が六月二十八日に行われた。この例祭の直後兵部庁によって例祭日が定められた。招魂社の新本殿が完成したのは明治五年であり、明治五年太陽暦の採用によって年四回の例大祭が恒例となって行く。その間明治四年十月には、三年から建設中であった高灯籠、いわゆる九段の灯明台が完成した。この和洋折衷のハイカラな灯明台が立った時、「わずか西各藩有志」の人々しか訪れることのない淋しい空間（江戸ッ子の心の支えは江戸の地霊平将門を祀った神田明神であった）であった招魂社は一躍「江戸以来民衆の信心厚い社寺と同じく、納札やお札所巡拝」の人びとで賑わうハレの空間……に変って行った……」（坪内祐三『靖国』新潮社、一九九九年）。従ってこの四年の兵部省管轄の大学南校物産局主催の物産会は過去期の靖国に賑いを斉らす過渡的な祝祭であった。それを示すのは南校物産局主催という事実である。多分町田久成が仕掛けたものであったろう。この時期に九六点古物部門に展示出来る人物は貨一郎らをおいて無いと町田は見ていたのである。そういった事実を示

すものとして、この年十月一日から十日間にわたって予定されていた湯島大成殿での博覧会が中止されたが、この時の幹事の中に柏木政矩と並んで松浦武四郎の名が見えるという事情がある。松浦武四郎が新政府の開拓使庁を退いて小川町に住んでいた時のことであろう。明治五年三月十日より湯島聖堂で開催された文部省博物局による最初の博覧会に柏木貨一郎は出品した。「柏木政矩雷斧播磨国極楽寺瓦経并願文三件」とある。混乱を極めた時期に古物を保存し、整理し記録した行為の始まりともすべきであろう。

この五年の博覧会は、四年の湯島で計画され中止された催しに替わるものとして企画され、四年十二月に、次の博覧会を翌年三月に開くことが決定し、予算も計上された。五年二月十四日には博覧会の開催が布告され、出品資料が色々な方面から集められた。出品物は、外国品や自然物が少なく、古器旧物に関するものが多数を占めていた。名古屋の金鯱が出品された事もあって噂が噂を呼び、四月まで延長された。

個人出品は一五〇人余りに及んでいたが、草創期の博物館に勤務していた人達、例えば内田正雄、蜷川式胤、柏木政矩、伊東圭介、町田久成、辻新次などが名を連らねている。柏木は黒子として留まろうと試みているようであったが、出品点数が圧倒的に多く、目だたざるを得なかったようである。同年八月、文部省博物局が「大和古寺等宝物調査、勅封開緘ノ為」に行った古社寺調査に参加。この調査は正倉院が天保以後はじめて開封されたものであった。この年文部省博物局と博覧会事務局が合併した。

明治六年三月十九日、これまで文部省の管轄の許にあった博物館・書籍館・博物局・小石川薬園は、太政官正院に属していた博覧会事務局に吸収併合された。

三村竹清による墓銘誌及び大川氏の部分を加えて記述を続けて見よう。

明治七年三月十八日（三十四才）　補正院十四等出仕。同月同日博覧会事務局事務取扱を申しつけられる。

明治八年二月十九日　奈良に出張、正倉院宝物調査に参加。三月三十日、内務省十四等出仕博物館掛となる。この年博覧会事務局は博物館と改称。所管は太政官正院より内務省に移る。この正倉院の初めての調査によって柏木の古物についての知識は飛躍的に増大したようである。

明治九年二月二日、内務省十三等出仕。一時期、博物館は内務省第六局にあったが、明治九年四月以降は内務省博物局と改称。

明治十年一月十五日、内務省十等属に任命せられる。博物局事務取扱となる。五月二十一日内務省九等属に任ぜられる。八月二十七日、京都・大坂・堺に出張。この年九月二十七日、内務卿は埋蔵物発見の場合は内務省へ届け出るよう布達する。

明治十一年三月二十六日、群馬県に出張。五月六日、内務七等属、七月三十日、神奈川・静岡に出張。

明治十二年三月、日本美術協会の前身である龍池会が創設され、その準備にかかわった。内務六等属に任ぜられる。「龍池会会員姓名表」には「號号一九番、職任書記柏木貨一郎」とある。柏木が姓を職と共に会員名簿に書き入れた珍しい例である。

明治十三年二月七日、奈良へ出張。三村の年譜はこの年で終わっている。墓誌によって述べれば、明治十九年博物局をやめた様子であると云う。この年三月一日農商務省官制改定せられ、博物局に関する条項を存しなくなっている。そこで、山高信離が博物館心得を仰せつけられ、十五日博物館を宮内省に移管し、この当時辞任したと香取

秀真は受けとっている。

明治初年から柏木の力倆を高く買っていた町田久成が博物館行政から身を引いた。博物局長官退官の命を受け、十六年には元老院議官となるが、二十二年に突然官を辞した。町田が辞したのは別の系統の話によるものである。町田は薩摩出身の美女を妻にしていたが、京都の舞妓、それも二人の姉妹を愛して離れ難くなり京都に居ついてしまった。廻りの薩長閥要人が説得したが聴き入れず結局は仏門に入ってしまった。「十六年の柏木の辞職はあるいは町田の博物局長官辞任と歩を一にした行動であったのかも知れない」と大川氏は述べる（同氏論文一四九頁）。柏木がかかわった博物館の歴史は明治初期の流動的な博物館行政のそれと重なる興味深い主題であるが、それは別稿で改めて論じたい。しかし本稿はまだ姿を現わしていない美術史家及び美術史学を論じるという意図で書かれているので、一部を大川氏の論述に依拠し紹介してみよう。大川氏は明治初期の美術行政を次の四期に分けて考える。

第一期　文部省博物局の時代（明治四年五月から明治六年三月）

第二期　博覧館事務局の時代（明治六年三月から明治八年三月）

第三期　内務省博物館の時代（明治八年三月から明治十四年四月）

第四期　農商務省博物館の時代（明治十四年四月から明治十九年三月）

大川氏はこのうち第一期から第三期までが町田久成が中心になっていた時期であるという。

こうした町田の傍らで明治初期以来協力し、博物館行政の一翼を担っていたのが柏木であったと大川氏は云う。大川氏は町田の数々の試みの中でも、「明治十三年の時点で、すでに宝物だけでなく、古社寺そのものも国家の資金で保存すべし、という見解を打ち出していることは注目すべきだろう」と云う。続いてこうした町田の見解には

日本建築に精通していた柏木の影響もあったかも知れないと大川氏は結んでいる。益田鈍翁以前に、町田久成という最も博学で知的に洗練された助言相手を柏木探古が持っていたのは興味深い事実である。近代日本の知的ネットワークの最も質の良い部分である。『新撰大人名辞典』第五巻に次の如くある。

性博古好事、鑑識に長じ、古書畫諸器を購求し、或いは模造して考古のために資し、明治初期に於ける古美術研究の先覚にして記憶せらるべき人である。

さらに大川氏は、昭和八年十月の「建築雑誌」誌上で催された保岡勝也、塚本靖、堀越三郎の「明治建築座談会」において発せられた次の発言を再録している（因みにこの中で塚本靖は東京帝大建築学教授、明治三十年代の三越で、坪井正五郎をはじめとする当時の各界の個性的発想の持主を集めた「流行会」の主導的なメンバーであった）。

保岡（明治の）貴伸（紳）住宅に最も関係の深かった柏木貨一郎さんや大河内さんと云うやうな人は何処かに這入って居りませうか。貴族方の家は主に大河内さんがやつて居られたやうですね。

塚本　糸平の家なども柏木さんの設計でした様です。

堀越　何れ学会の雑誌に載っているでせう。純粋の日本建築家ですね。

このように建築の分野では日本建築の正統な工匠として知られていたことは確かであるが、最近まで美術の中で柏木についての言及が比較的少なかったこともまた確かである。

維新期の博物館運動

ここで、町田久成と柏木を念頭に置いて維新の博物館運動について少し触れてみよう。

慶応三年（一八六七）　田中芳男（外交界の要人、植物、昆虫に感心が深かった）が、第二回パリ万博に日本の昆虫標本を携えて派遣される。十二月に、フランスから持ち帰った品を箕作麟祥邸で展示する。

明治元年（一八六八）　六月十五日田中芳男、新政府の開成所御用掛りとなる（田中芳男は特に博物館運動に熱中した）。

明治二年十二月十七日　大学校（のちの東大）と改称。開成所を「大学南校」、医学校を「大学東校」と称する。

明治四年四月二十五日　「集古館」の設立を献言。

同年五月十四日　招魂社内で初めて物産会を開く。柏木貨一郎が出品したのはこの時のことである。

献言の趣旨は、維新以来天下の宝器珍什が失われ、いたずらに〝厭古尚新〟の幣風が生じていたと、椎名仙卓氏は述べるが、これは、廃仏棄釈の風潮のしからしむるところであった。明治初期には武士、旧大名が古器物、美術品を捨てるようにして郷土に戻ったり、静岡に移住した。天皇権力の復権は直ちに神道尊重に移り、それは仏教排斥につながり、極端な例は法隆寺の五重塔の売却、建物が解体され薪として使われる寸前までいった。西洋諸国には古器旧物を保存するために集古館があり時勢の沿革や往昔の制度文物を考証するために役立っている。わが国でも速やかに集古館を建てるべきである。もしそれが不可能であれば、府藩県へ古器物の保存をはかるように布告してほしい、というものである。加えてすでに維新以来、歴史的に由緒のあるものが次々に破壊され散逸しつつあるので、一刻の猶予もゆるされない事態に直面していることをつけ加えている。西欧の状態についての記述はクシトフ・ポミアンの『コレクション』（平凡社）に興味深く論述されている。日本の当時の古社寺、記念尊重の風土については京大人文研の高木博志氏の浩瀚な大著『近代天皇制の文化史的研究』（校倉書房）があるから「集古館」

設立の建議の世界的拡がりと意味については今更云うまでもなかろう。

椎名氏はこの献言は当時、大学物産局にかかわっていた町田久成や田中芳男らの考えによるものであったと述べている。ということは既に明治三年頃町田と研究会を行っていた柏木貨一郎や松浦武四郎がこの運動に加わっていたことを意味するものだろう。

太政官は、大学からの建議に基づき、五月二十三日、古器物保存方を布告した。次のようなことがその中で記述されている。

……古器旧物の類は、古今時勢の変遷、制度や風俗の沿革を考証するうえに役立っている。旧を嫌い新を競う流弊から、失われたり、毀されたりすることは実に惜しむべきである。各地において代々伝えられている古器旧物は、別紙品目の通り細大を論ぜず保全するように、とあり、所轄官庁を通じて品名提出を命じている。

当時、この命令によって正倉院と中央の間にトラブルが生じたこともあるが、それは少し別の事に属する。何れにしても、柏木、松浦の外に古物蒐集家は少なからずいたが、こういう視点で布告を出す町田らの近くに居たのは矢張り柏木ということになる。なぜなら松浦は開拓使庁の職を辞したばかりであったからそれほど協力的な立場を保持していたとも限らない。

正倉院調査について云えば、柏木は明治五年と八年に参加している。大川氏は柏木が参加したのは文部省博物局が「大和国等社寺宝物調査、勅封開緘為」に行った古社寺調査であったと記している。この調査は正倉院が天保以後はじめて開封された点で注目すべきであると述べている。

柏木は明治五年の古社寺調査に参加しているが、正式の構成員としてではなかった。文部大丞の町田久成、文部

省六等出仕の内田正雄、蜷川式胤の三人が私費を出して柏木を雇い入れた。又この調査には写真家の横山松三郎、画家の高橋由一が加わっていた。横山は写真の正確さで写生をする伎倆を持っていた。高橋由一は洋画家で近代初期の都市（山形）や道路（福島県）の土木工事を克明に描いたので知られている。横山、高橋らは写生の力（古器物模写）を買われての参加であったろうが、柏木の場合は招魂社の博覧会で示したらしい古器物や古書画の鑑定の力量によるものであったろう。

明治七年、柏木が正規の職員として登録される。彼の名が所員録に記載された。明治八年、正倉院宝物調査が行われた。七年に奈良県が宮内省に対して、八年三月一日から五月二十日まで、東大寺大仏殿において博覧会を開催するため、正倉院宝庫の開封を願い出たことに基づくものであった。この頃の博物館行政には文部省、博覧会事務局、宮内省、内務省、農林商務省といった様々な省庁が関係して、そのために関連の部は流動的だった。古物中心と生物学中心の思惑が入り乱れていた。この点について更に解明する試みは別の機会に行ってみたい。

とにかく宮内省からは香川敬三と山岡鉄舟（鉄太郎）が参加し、博覧会事務局からは　蜷川式胤、菅蒼園、柏木貨一郎の三人が参加した。柏木は五年の調査に示した力量によるものであると大川氏は云う。

明治十二年に創設された龍池会に柏木は加わることになった。日本の古美術を衰退から救おうと試みた古美術愛好家のクラブであった。廃仏棄釈に始まる古美術破壊の傾向を喰い止めようとするものであった。だが残念ながら、フェノロサや岡倉天心を中心とする反西欧絵画運動と結びつけて理解されたために美術史研究では好意的にみられていないようである。たしかに、フェノロサには教えるところ大であったようである（大川前掲書、一四九頁）。龍池会は会報が復刻されたため一人一人の会員についての研究が進むと、会に対する評価も異なって来るであろう。

柏木は大川氏によると早くからこのサークルの月一回の品評会に出席しており、設立の準備委員のひとりであった。

明治十七年六月二十五日から九月中旬までフェノロサは文部省調査団顧問として関西調査旅行を行っている。この旅には天心、柏木、ビゲロー、それにビゲローが個人的に雇い入れた画家安藤広近らが参加していた。この調査は法隆寺夢殿を開扉して秘仏の救世観音像に光りを当てたことで知られている。

大川氏は高橋箒庵の「近世道具移動史」の中に一項目が設けられている点につき次のように引用している。

柏木貨一郎は幕府作事方の家系で、最も日本式建築術に通じ、書画骨董何くれと愛好せぬ者はないが、中にも古筆物大和絵、古器物に対しては特殊の鑑識と執心とを持ち…。（高橋義雄「近世道具移動史」、広文堂書店、昭和四年）

柏木と、弟の克徳の影響で益田孝が茶の世界に入り大茶人になっていったことはやゝ知られている。柏木が益田孝の御殿山の邸内に禅居庵という茶室を設計したり、後述の如く孝の父益田天福の隠宅をも手掛けたことも既に述べた。三井有楽町集会場の設計の仕事も益田との関係で彼の手にゆだねられたのだろうと大川氏は推定する（集会場については石田繁之助氏の「三井の集会所――有楽町から札幌まで」（日刊建設通信新聞社）がある）。飛鳥山の渋沢邸の設計も近代初期の数奇者たちの人脈の中にあって初めて理解できると大川氏は云う。確かにそれは正鵠を射た意見である。但し、明治五年柏木が町田に協力している頃、渋沢栄一は大蔵に居ながら、博覧会事務局御用掛りも命じられているから、知らぬ仲ではなかった。

三井集会場について一言加えるならば、設計者の柏木の趣味を反映してか、舞踏席演芸席が設けられているのが興味深い。柏木自身音曲や演舞に長けていたという。この事実は横河民輔が西洋式の集会場を設計した時に演芸の

空間が設けられたという事実と照らし合わせて興味をそそる。益田の家にも同じ傾向があり、末子三番目の弟が音曲演舞好きであり、孝の息子で後継者であった太郎（太郎冠者）が、むしろ横河民輔設計の帝劇の専務取締役としての仕事に身を入れ、オペレッタの台本を書いたり、「今日もコロッケ、明日もコロッケ」と唱う劇中歌を書いたことからも伺われる。

明治二十七年十月、有楽町集会所が竣工すると、その翌々年十二月、三井地所はただちに三井銀行からこの土地と建物を買い取った（石田繁之助前掲書、二三頁）。

有楽町集会所には明治三十一年に竣工した西洋館と呼ばれる木子清敬の設計になる建物もあった。しかしながら石田氏の表現による「照りのある大屋根を持ち千鳥破風で飾られた純和風様式」という柏木貨一郎設計の和洋折衷形の建物もあった。

他方三井の純洋式を実現していく存在として辰野金吾の弟子であった横河民輔も加わりはじめていた。横河は旧駿河町三井本館工事にも携っていた。

三井家にはむかしから、謡曲の会（養和会）なるものが組織されていた（石田繁之助、前掲書、一九七頁）。石田氏によると明治二十九年六月六日の項に「第四十三会養和会が有楽町において開かれた」とあるところから見て、その会場が柏木貨一郎の日本館であったことが明らかであると云う。益田孝が謡に関係していたこともここから当然理解されるところである。

三井家で最も大事な行事である家憲朗読式は、毎年正月に実施されるのをつねとした。三井家の始祖高利長男、高平・法名宗竺による「宗竺遺書」を規範として制定された三井家実施奉告祭が、はじめて有楽町集会所でおこな

われたのが明治三十三年七月一日であった。その会場は柏木貨一郎の日本館であった。当時は木子清敬の西洋館も出来ていた、貨一郎の日本館の方が重視されていたようである。

鈍翁との友情と柏木の死

「風流記事」の編者筒井紘一、柴田佳作、鈴木皓詞氏らの「益田鈍翁の周辺」という巻末座談会の中で次のような発言が為されている。

鈴木　各家に目利きがおられたのですね。

柴田　ああ、一流の大収集家にはね。鈍翁の場合にはね。鈍翁の場合には、柏木探古（貨一郎）とか田中親美とかになるわけです。

こうした証言を得て、柏木は旧幕時代の建築関係の幕臣であり、維新後、横浜に住み古物を大量に集め、目利きとして色々な方面で重宝がられ、古代史家として田口鼎軒（卯吉）に協力し、益田鈍翁にとっては父の住居、茶室の設計・建築家であり、古物鑑の貴重な助言者であったという姿が見えて来る。つまり、柏木は大学が過度に制度化する以前の蒐集家（コレクター）、古代史学者、美術史学者、建築家といった分野に跨がるルネッサンス的人物であったという事になる。

「風流記事」にはその後柏木の名は現われない。その理由は、柏木の急死にあった。柏木と鈍翁の関係は、単なる主従といった単純なものでなく、友情に裏打ちされた緊張をも含む関係にあったのである。「鈍翁の眼」目録の鈴木邦夫氏による「鈍翁コレクションのアルケオロジー」は次のような事情を伝えている。

…一八九二年（明治二十五）三月二十九日に（鈍翁は）柏木貨一郎（号は探古）に百五十円を貸したことも「源氏物語絵巻」「沙門地獄草紙」「辟邪絵」を孝が獲得する伏線となる。四月三十日が返済期限であったが、六月三十日現在返済されていない。柏木は借入、返済、遅延、返済を繰り返したようであり、やがてこれらの品を担保に差し出さねばならなくなる。……和解が成立した後、「地獄草紙」一巻（『沙門地獄草紙』）は孝のものとし、もう一巻（「辟邪絵」）と「源氏物語絵巻」を柏木に返したのである。このとき柏木（一八四一年生。孝より七歳上）は孝に手紙を送り、君の態度はけしからんが、美術を愛する気持ちはよくわかる。僕は気楽な生活を送っているので、激職にある君の方が先に死ぬだろうが、もし自分に万一のことがあった場合は、これらを君に渡すことを約束すると伝えた。孝は手に入れた「地獄草紙」一巻を一八九八年（明治三十一）三月二十日の第三回大師会で展覧に供した。

ところが、同年九月五日、柏木貨一郎は上根岸の自宅から王子の渋沢栄一邸に向う途中か、汽車に接触したか煽りをくらって転倒し、六日に死亡してしまったと鈴木氏は伝える。ここで柏木の自宅が上根岸と書かれているところから察すると、中根岸町七十二番地に住んでいた柏木祐三郎は息子で同居していたということになる。香取秀真は前述の一文で柏木の晩年の住宅は根岸の御隠殿下辺りと記している。

同じく鈴木氏によれば享年五十八歳、戒名は気楽坊探古柏園乗空禅士。

山中共古と柏木探古の関係については、故広瀬千香さんの「山中共古ノート」1に「明治初年の古銭家」として本名と稚号、在所などが記されている。

多気志楼　松浦武四郎　神田五軒町に住す。

将古亭　成嶋柳北　此頃は下谷か
探古楼　柏木作一郎　根岸
友泉堂　友野長祥
　　原胤昭　銀座か
温古堂　丹羽昭陽

これに山中共古自身と守田宝丹と加えるとほぼ大半の古銭家のリストが出来る。原胤昭が入っているのが意外である。友野と丹羽について筆者が知るところは少ないが、柏木が当時知的な構えの最良の人々の中に加えて記されているのは面白い事実である。

「続共古日録」第九巻の本文に次の如き記述がみられる。

探古、柏木貨一郎墓誌及同氏に就て

江戸幕府、大工棟梁、号探古斎、明治甲戌出仕博物館奉南都整理正倉院宝器、前後三次。丙戌家居克倹守身篤信好古審度量、鑒銭貨長鑑識、工構造誕于、天保十二辛丑正月十六日殯于明治三十年戊戌九月六日享年五十八、火化瘞骨於深川寒光禅寺、此壺是也。法諡曰気楽坊探古柏園乗空禅士、寧楽高華平安美妙柏園鎖煙古道不照嗚呼哀哉。大槻如電　宮崎如藻刀

この墓碑銘を作っているのが旧仙台藩士大槻如電というのも興味深い。既述の如く如電は維新の際、故なくして獄に繋がれた父大槻磐渓の罪を晴らすため新政府の史料編纂局に勤め父の冤罪が明らかになると、明治六年官を辞し、根岸に住み、昭和六年死去に至るまで再び宮仕いすることなかった。根岸一帯で巌谷小波など若い文士達に怖

れられた。大変な皮肉屋であった。生き方において、つまり、公の道での出世を選ばなかったという意味で柏木と相通ずる人物であった。彼が根岸に住み根岸党（派）とよばれる反政府感情を共有する文人達に仰ぎみられ、柏木貨一郎と近所付き合いをして、墓碑銘まで書くに至っていたというのは大きな興味をそそる事実であった。

これに続く文は山中共古のものである。

古物古銭家にして、上根岸に住居されし。同氏蔵に古和銅中の希品、跳和同を所持されたり。又隷書寛永とて、寛永通宝中の稀品を所持されしが、生前根岸武香氏に贈られたりし。此寛永銭のみにて七十金を送られしとき く。跳和同は三百金の価なりしとかきけり。此如き珍物外にも多く持ち居られたり。

謚気楽坊とあるは、同氏の蔵に、後水尾院のお持ちになりしとかいふ人形ありて、其名を気楽坊と称されしを御待されしと、同氏の存命中にきゝしことありし。謚されしは、これによれり。

根岸の奥に尼寺あり。小野お通云云の縁起ある辺りに、益田天福翁（古徳、孝の父なり）隠宅設計は、探古氏の手によりてなされ、心持よき住居なりしを知る。惜しむべし、同氏根岸踏切に於て、不慮の死につかれしを。

以上

流石に古銭家共古の手になるだけのことはあって希品「跳和同（銅？）」、「隷書寛永」という稀品に言及している。根岸武香は既に述べたように勤王家で後に「集古」会初代会長、坪井正五郎の考古学における協力者であった。謚になった気楽坊が、後水尾院の所有の人形の名で、柏木が所有していたという事実、そして謚したという事実は、「鈍太郎」という名の茶碗を万金を投じて己れの物とした上で自ら鈍翁と呼んだ親友益田孝を思い出させる。

根岸の奥に小野お通云々の縁切寺という言及は、さしずめ「宮本武蔵」のお通を想わしめる。柳田國男が言及し

ていた筈である。この寺の近くに孝の父古徳（天福）の隠宅があって、その設計が柏木の手なるものであることの最初の共古による言及の出処がこれで判って筆者はほっとしている。「心持よき住居なりしを知る」。柏木の死についての共古の説明は「惜むべし、同氏根岸踏切に於て、不慮の死につかれしを」というのは近くに住む人間の哀悼の心情のこもった言葉といえよう。

この後広瀬千香さんは気楽坊人形と御自分の出遭いついて述べ、気楽坊人形の後日譚を語り、田中日佐夫氏の「戦後美術品移動史」より柏木について次のような部分を引用している。

氏は住宅建築をも手がけているが、就中茶室にすぐれ、政治家、財界人の依頼をうけ、とくに原三渓翁に愛され、お抱へのやうなかたちであったと。古筆もの、大和絵、古道具などの名品鑑定の外、執心を傾けてゐた愛蔵品の中には、源氏物語絵巻、病草紙、気楽坊などの名品ぞろひであった。

痩形の人、江戸情緒を好み、弁口達者、書画の講釈となると、滔々一座を圧した――と述べられてゐる。

広瀬千香さんは柏木貨一郎の墓のあるという深川の寒光禅寺を訪ねたことを書き残している。寺も墓も一変していたという。此寺は恵然寺と称し古刹であったが、明治二年寒光禅寺と変えた。

柏木家は墓所を谷中の天王寺に移されたらしい。

貨一郎の息子祐三郎は養子であった。中根岸町七十二番地に登記している人物であるが、祐三郎も骨董の鑑定を職としたらしい。董氏という孫を訪ねて千香さんは気楽坊人形について具体的な情報を得ている。（広瀬千香「山中共古ノート」）

ついでながら、董氏の情報として貨一郎の事故死に関連して「降魔の釈迦」の鋳造に関係した三人の人物が全部

事故死を遂げたと伝えられていることを教えられた。当時家の守本尊として柏木董氏は仏壇に安置していた（広瀬前掲書）。

「源氏物語絵巻」と「地獄草紙」のゆくえ

鈴木氏の説くところによると貨一郎の死後、益田孝は柏木貨一郎の生前の約束を楯に取って、弟の英作を使って柏木の養嗣子の祐三郎と、旧蔵の古美術の売却交渉に入ったとある。とするならば祐三郎が貨一郎の養子であることは明らかになった。と同時に共古の「集古会」と柏木家が無関係でないことが明らかになり、貨一郎と坪井のコロボックル説、更にこれに反対した山中共古が共通のネットワークの中にあったことが改めて明らかになり集古会のつながりがぐっと厚みを帯びて来ることになる。

柏木祐三郎との交渉の結果、「源氏物語絵巻」、「地獄草紙」一巻と「猿面硯」の三点を引きうけることで話がまとまった。「地獄草紙」一巻の方は益田英作が金を出して自分のものとし、「源氏物語絵巻」と「猿面硯」が孝の手に渡った。

孝が「源氏物語絵巻」を初めて大師会で展示したのは一九〇一年（明治三十四）三月二十一日の第六会である。このとき田中親美の模写（鈴木氏によれば、これ自体が美術品といわれる精緻な複製、孝が制作を依頼）を並べて居り、鈴木氏は一九〇〇年（明治三十三）三月二十一日の第五会では本物も模写も出品されていないことから、孝は一九〇〇年に「源氏物語絵巻」を手に入れたと断定してよいであろうと云っている。美術品移動史中の最も興味深いエピソードの一つであろう。

「史海」については先述したが、第一巻から第三十八巻まで刊行された古代史と西洋史への関心が中心となった歴史研究同人誌で田口鼎軒が中心になって編集された。田口卯吉（鼎軒）の他には久米邦武（易堂）、饗庭篁村（根岸派の作家、劇評家）がいた。篁村は「文化文政度の小説家」及（続）を寄稿している。久米邦武は物議を醸した「神道は祭天の古俗」を寄稿している。柏木貨一郎は古代史家に徹して居り、「武蔵国相聞往来歌」（第拾六巻）及び「埼玉郡も上古は入海あるべし」（第拾九巻）他、「埼玉津浅の芋手巻」（第貳拾参巻）において上代において埼玉津浅という土地が入海であったかという歴史地理学的問題を久米邦武と論争という形で寄稿している。この他「南北人種分界地図に就て落合氏に答ふ」に於て坪井正五郎の唱えたコロボックル・アイヌの先住民説に触れて、コロボックルの存在は否定せず、むしろコロボックルは土蜘蛛であったであろうと推定している。坪井正五郎のコロボックル説は当時大変な反響を喚び起し、「集古会」の、坪井と共にリーダー級であった山中笑は反対論者であったが、柏木はどちらかと云うと中間の立場に立っていたようである。

「史海」の明治四十三年二月の通信欄には次のような記事がある。この柏木の家で集まった会合について述べている。「過ぐる日同人根岸なるなにがしの宅に集いて、更くるまで語り合ひぬ、其席にて柏木貨一郎大人は古人の事どもいと詳らかに現に玉ひしが如く語り玉いて」、と柏木が親しい仲間と史談を交わせたことが記されている。「…此の人は冒頭に高説を伺ひ云々とあれ共大人は殆ど一言も吐かざりしめ玉わざりしとは、同席の人々の保証する所也」、同席者は高梨利四郎、永井久太郎、大岡力、益田英作の諸氏である。中でも益田英作は益田孝の弟で骨董買いに生涯を捧げた茶人であった。このへんのいきさつは根岸といえば旧幕臣のたまり場、大槻如電も住人で居り、山中共古も遠からぬ下谷で牧師をし、柏木貨一郎が、鈍翁の父の家を建てたと証言している近さである。従って鈍

翁ー弟益田英作ー柏木貨一郎ー山中笑ー集古会のメンバーの間には緊密な友情の念が存在していたと考えて間違いなかろう。「集古」の中の会員談叢（福田寒林上人）に次のような記述がある。

柏木貨一郎といふ人は中々人の物は感心しない人で何を持つて行つてもキットけなすので皆ンナ一番其鼻を折つてやらうと思はないものはなかつたが或時あんまり青瑯玕といふものは鑛物中で一番堅いものだ相だが今日は一つ其硬度を試めしたいから御愛蔵の品を出し給へといふと何をするんだといふから懐中から金剛石入りの硝子切を取出してこれで一寸障はつて見る積りといふと飛んでもないことをいふと早速片付られたことがあつた。

柏木氏に品物が這入るとそれが高價に賣れて行くのは不思議な位だった一例をいふと或入札で畠山如心齋が青瑯玕の曲玉を三分で落とした夫れを十圓で古銭商の鷲田（先代）に賣つた鷲田が柏木に五圓儲うけて納めると夫れが間もなく二百五十圓で某氏に賣れた先つ其人に徳があつたといふのでせう

柏木は松浦多氣四郎翁をサンザンに悪口し其著はされた撥雲餘興など徹頭徹尾罵倒して居たが何か原因があるんだろうと思って探ぐってみると案の如く松浦が撥雲餘興の表紙に使ひ度いといふので柏木から古寫經を一巻借りて置いたが返へすとき其中から數寸計り切り取って返へした然し柏木も柏木だから貸すときに其經巻を目方に掛けて置いたのだから承知しない到頭松浦から切り取った分を取り返へした夫れが原因だった目方を量るというような話は聴いたことが無かろう。相手が日本全国を廻って古物を蒐集した松浦武四郎だと云うのが面白い。

もう一つ、昭和十四年刊の『東美』掲載の座談会記事を次に紹介する。

森川氏　隆能源氏が出たのは、その頃でしたか。

田中氏　あれを得られたのは、まだ後です。

森川氏　なんと言っても、あれは日本の代表的繪巻ですね。

田中氏　益田家で一、二を爭はねばならぬものです。あれは元は蜂須賀家にあったのですが、維新當時諸大名が江戸を引揚げるときに、みな色々のものを處分しました。蜂須賀家の處分のうちに、あれが出て居ったのを、蜷川といふ人が買った。ただの七圓だったさうです。それを程へて柏木貨一郎氏が四十圓で買った。その頃の四十圓は今とは違ふ、僅か七圓だったものを二、三年のうちに四十圓で買ったといふんで、柏木は人から氣がちがったんぢやないかと言はれたさうですが、柏木も偉い人だ。（中略）また何處から出たか知りませんが、例の光長の地獄の草紙二巻、みな今は益田家にあるが、これも柏木が持ってゐたんです。柏木は御承知やうに幕府の普請方の家で牛込の甲良町、あそこに甲良といふ普請方が居って、その甲良の次を柏木がしてゐたといふので、柏木は維新になってからも建築の請負業をして居った。現在澁澤家の家も、益田さんの告別式の座敷も、桂の御所を寫して柏木が建てた。そんなことをちょい〳〵請負ってゐたらしい。ある請負をする時に保證金か何かに必要だったんでせう、益田さんに隆能源氏と地獄草紙を抵當に入れて、金を立替へて貰った。さうしたところ、その仕事が首尾よくいって、元利を揃へて益田さんに受出しに來たんですが、益田さんは金を受け取らず抵當物も返さない、なんと言っても返へさうとしない。終ひには柏木も怒り出して、元金に利息まで揃えてちゃんと持って行くのに返さぬといふ法はない。これまで長らくつき合って來たが、俺はもう益田とは絶交すると、毎日のやうに益田家へ來てゐたのを、それから以後ぴったりやめてしまった。さうすると朝吹英二氏が、

あれほど始終來てゐた柏木が、この頃少しも顔を見せないのはどういふ譯かと、不思議に思ふて聞いて見ると、いまいふやうな次第だから、それは益田が悪い、まあ俺に委かせろ、益田を説得するからといふんで、朝吹氏が仲へ入って調停をした。その結果どうなったかといふと、朝吹氏は柏木に益田は金などはどうでもよい、なんとしても、あれが欲しくてしょうがないんだから、三巻のうち地獄草紙の一巻を益田にやってくれ、それで解決してくれと言った。柏木は大負けだがやむなく承知して、隆能源氏と地獄草紙二巻のうちの一巻きとを、漸く取返して解決した。

かうして解決してから、柏木は益田さんに手紙をやってゐる、これが面白いんです。その手紙は私も見て居りますが、いまも益田さんのどこかにあると思ふ、隆能にこの手紙を附けておくとよいと思ふが、手紙は先づ益田さんを責めて、返さぬなどといふことは怪しからぬ。今まではさう云ふ人とは思はなかったが、これでは以後あなたと交際は出来ない。然し如何にもあなたの美術愛好の熱心さには自分も敬服する。この絵巻をそれほど愛好して居ると思ふと自分も嬉しい。であるから若し自分が死んだら、あれはあなたにお譲りしても差支ない。けれども洵にお氣の毒なことには、私はいつも遊んでばかり居る身分であるが、あなたは毎日身を縮めるやうな劇務に當って居るし、年齢もあなたの方が上だ—たしか一つ上だったと思ふ—だから、どちらから言っても、そのことは難かしからうと書いてある。この手紙の文をすっかり出したら面白いでせう、普通の人なら、こんな手紙を受取ると馬鹿なことをいふ奴だ位で破いてしまったかも知れないが、そこは益田さんはえらい、ちゃんとそれを蔵っておいた。しまって置いたところが、その後柏木は、飛鳥山の澁澤家の普請を請負て毎日監督に行く、柏木家は根岸であるから山下を突切ってゐる鐵道線路の、少し高く坂になってゐる踏切で倒れた、

その時分はまだ人力車時代だから、柏木はいつもそこまで人力車で來て坂を歩いて登って行ったのであるが、ある日踏切の所で車を降りて渡らうといふ時に、汽車に轢かれたんぢやないが、煽りを食って倒れて腦震盪を起した、車夫が振返って見ると倒れて居るから、驚いて車に載せてどこかの病院に入れたんだが、ひどく打ったんで人事不省に陥って三、四日で亡くなってしまった。それで手紙の時分のことは私は知らぬが、その時のことは知ってゐる。柏木はそんなことで死んだ。そこで一年斗りたった時に益田さんは英作さんを以て、例の手紙を證據に柏木の子の祐三郎に交渉した。死んだ時には隆能源氏も地獄草紙も譲るとあるから、是非あれを譲ってくれと談判して、どうだろ英作さん五千圓で隆能源氏と地獄草紙と、それにもう一つ猿面硯の三つをこめて取って來た。

その歸りがまた面白い。柏木は根岸で一方は御殿山。私は當時池の端にゐたんですが、私の家は池に面して二階が座敷になってゐた。私が二階に居ると家の前で「田中君々々々」と大きな聲で呼ぶものがある。見ると英作さんだ。人力車の上で「君居るんなら見せるものがあるから、一寸上る」と言って二階へ來て「君、どうだ僕いまこれを取って來たよ。」日頃吾々が崇拝してゐる隆能源氏だから「これは偉いものを持って來ましたね」「しかし、これはね、君が餘りほめるものだから、兄貴が大層偉いものだと思ふんだが、なに君、これより地獄草紙の方が上だよ。地獄草紙を僕は千五百圓で買ふことにしたんだ。隆能源氏は三千圓、猿面硯は五百圓、みんなで總計五千圓だ。そのうちこの地獄草紙を僕に千五百圓で取られて、一方を三千圓で兄貴が買ってよい心持ちにならうといふ、君總領の甚六とはよく言ったものだね。君が餘りほめるから、こんなことになるんだよ」と、滅茶くちゃに悪口を言ひ、當てこすって左様ならで歸ってしまった。然し地獄草紙も名巻であるから私も

何ともいひ様に困った。事實、英作さんは千五百圓で地獄草紙を取ってしまったんだが、段々すると地獄草紙は、ああいふ残酷な図であるし、一方は優美で何と云っても繪巻中の最高峰でたまらぬものだから、外國人なども隆能源氏の方を滅茶々々にほめる、けれどもよいと思った地獄草紙は、誰もそれほどほめてくれぬので、終ひには「どうも、あの時は兄貴をやつっけたと思ったが、段々世間の評判を聞くと俺の方がやられてゐる。やっぱり兄貴の方が俺より上手だわい」と言ってゐたが、あとにはその千五百圓の地獄草紙も兄さんに取られてしまって、いま皆益田家に揃ってゐる。」〈「益田鈍翁を語る」對談　田中親美・森川如春／『東美』第5号昭和十四年（一九三九）一月発行／『東京美術青年会六十年史』東京美術青年会　平成八年（一九九六）一月発行に再録〉

柏木貨一郎の見識と誇りの高さとユーモアと不運を語るエピソードである。

鈍翁は昭和八年、家督を長男の益田太郎に譲った。太郎は父の女性をめぐる生き方に批判的であったらしく、三井をはじめとする実業の世界に深入りせず、むしろ帝劇（帝国劇場）の専務取締役としての仕事に熱心で、益田太郎冠者というペンネームで喜劇の劇作家として活躍し、劇中歌の「今日もコロッケ」の歌が人口に膾炙し、後世の記憶にはこうした歌の作者として残りそうな存在となった。鈍翁のアドヴァイザーとしての柴田桂作氏は「隠居した鈍翁は家督を太郎さんに譲って……隠居した鈍翁は、一番蔵の鍵を太郎さんの執事に渡してしまわれて、極上のものは勝手にしなかった。むろんお金もそうだった。」（前掲「益田鈍翁の周辺」）

一事が万事太郎の認下制にしたのである。であるから鈴木皓司氏と柴田氏の次のやりとりが光るのである。

鈴木　家督を継いだ太郎様を、立てられたわけですね。

柴田　益田家で公式にお客をお招きした時には、太郎夫妻を主人の席に据えてご自分は次に控えておられた。つまり鈍翁はそういう頭なんだ。几帳面で、一番偉いのは徳川家で次に三井家の御本家、その上に皇室をいただいていると観念しているわけだ。徳川家も明治になってから縁が切れているわけだが、精神の中では徳川家の家来だという考えがあったんだ。（同書一九二頁）

鈍翁は明治に入っても旧幕臣の気概を保ち、その表現の一つが、茶会によって歴史を越え、精神の底では徳川の支配秩序を保持する構えを捨てていなかった。旧幕臣の騎兵隊長の志を失っていなかったと云えるであろう。

バリュー・フリーとしてのコレクション

近ごろコレクションについての関心が昂っている。コレクション（蒐集）につきまとう言葉としてはその行為の原動力として「趣味」が挙げられる。趣味という極私的な動因から公共博物館に至る一大収蔵品の間には様々なきっかけや動機が秘められており、先述のポーランド出身のクシトフ・ポミアン『コレクション』（吉田城・吉田典子共訳、平凡社）は「趣味と好奇心の歴史人類学」という副題を副えて訳出されている。

クシトフ・ポミアンは、今でこそ蒐集家はその蒐集における様々の噂話のせいでやや詐偽師的に見られていることが多いが、アンドレ・シャステル（フランス美術史家）の言葉を借りて、〝蒐集家が「芸術の世界の中心人物」であり、もっと一般的には文化の中心人物であることが認識されるようになるだろう〟（『コレクション』、四頁）と云っている。本稿で論じて来た益田鈍翁を代表とする蒐集家と、柏木貨一郎をはじめとする彼らの助言者こそは

まさにその名は残らないが殆んど一心同体の協力者であった。

ポミアンの研究は西欧における物の体系としての博物誌の成立であるから、その規模の大きさに於て、日本の事例では追いつかない。

日本の博物史はそもそも南海からもたらされた博物史に始まる。これは自然の太古の歴史と共に始まり古代においては吉備真備にはじまり、遣唐使の運んだエキゾチズムに受けつがれた。十世紀を越えても大江匡房あたり三代の天皇に師表として学者としても仕え、その書庫は千種殿として知られ、書物は唐宋の時期に流入した夥しいものであった。ペルシアからの招来品も含めて正倉院という一大倉庫が形成され、これらが十三世紀をめぐる源平動乱の際に散逸したことはわかっているがどこへどう散らばったかは知られない。そして室町戦国に突入した日本において冷泉家の蔵品の如く奇跡的に伝わったものは特異な例でシステマティックに伝わることは多かったと云えない。大部分の貴重な品は旧大名家の所蔵として残るのみであった。

近世日本は幕府が地方領国の産業奨励を行ったこともあって、町のコレクターが簇生した。植物、薬物、鉱山物など様々な品の蒐集家が出現して町中で物産会などを開き所蔵品を開陳し合った。中でもよく知られたのは木村兼葭堂で彼は大坂の人で町中で商業を営むかたわら、尨大な図書を所有し、訪れる人に対し、博物誌的蒐集品を惜しみなく提供した。晩年の、作家中村眞一郎は兼葭堂について未完の大作（雑誌「新潮」に連載）を書いていた。又松平定信は隠居後「集古十種」を編集した。これは武具をはじめとする様々な器具の目録の如きもので読む博物館の体を成していた。

ヴェネツィアのコレクションについて、三人の著者の手になる「ヴェネツィアとヴェネツィア県にかって存在し

た、また今日存在する博物館、絵画館、ならびにさまざまな公共・個人コレクションの一覧」という書物がある。三人の著者は、コレクションの歴史はヴェネツィアにおける芸術と文学の歴史、またより一般的なヴェネツィアの生活史の重要な構成要素であると見なした。この主題を取り上げることによって、われわれは…政治的現象として、さらには人類学的現象としてのコレクションについて、より一般的な射程を持ったいくつかの命題に到達するためである。（『コレクション』三六八頁）

このように一地方の生活の総体を再現しつつも地方的限界を越えるための「人類学的現象としてのコレクション」という射程を持つものであると定義する。

こうした前提のもとにポミアンはコレクションの弁別的特徴について重要な定義を加える。つまり「コレクションを構成する品物は一時あるいは永久に、営利活動の流通回路の外に保たれているということである」（同三六六頁）

ポミアンの云う第二の基準は（単なる財宝とコレクションの主な違いは）「コレクションがそのために閉じられた場所で、視線にさらされているということである。視線にさらされているという、その非実利的な交換の流通回路にはめこまれているということである」（同三七〇頁）

この指摘は極めて深い意味を持っている。C・レヴィ＝ストロースの『悲しき熱帯』の中でブラジルのナンビクワラ族の小バンドの首長は数人かの妻を所有していることを述べつつ、妻たちの義務は他の婦人とは異なり一般の流通、労働の回路から切り離されていることを強調している。女性たちは一般社会の中では農耕をはじめとする労働に従い、時期が至れば婚資と交換に結婚する。夫々々何らかの価値の体系の中に組み込まれている。ところが首長の妻たちの役割は常に首長と戯れ遊びこけている。食物生産とはかかわりを持たない。新鮮に無邪気に戯れる

ことによってこれらの妻たちは舞台上の女優の如く、人間を初源的な無垢の状態に引き戻し、人々の心に生きる力を与えるのである（中央公論社　一九七七年）。日本の古代の朝廷における女性達にもこのヴァリュー・フリーへの期待が無かったとは云えない。

次にポミアンはコレクションの品物の置かれ方を問題にする。彼によれば、コレクションへの接近がある種の公衆（それらは実にさまざまのやり方で決められる…例えば茶室――引用者）に開かれていること、また品物の存在する空間の整備（茶室）や品物の配置によってそれらを見ることができるということが前提となる。人類のためにコレクションを作ること（神のために作るということもあるが、いまここでそれは関係ない）はしたがって、それを構成する品物の展示、つまり陳列方法や照明、見物人の順路などの問題を解決することである。囲い（クロチュール）とは盗難や環境の腐蝕作用から保護するだけでなく、それがひとつの全体のなかに含まれているかのように知覚させるものでもある。そこから建具と家具の重要性が生じる。それらは囲い（クロチュール）を物質化するもので、コレクションに対し、額縁が絵画に対して果たしているのと同じ役割を演じるものである。

引用が少し長くなったきらいが無いでもないが、コレクションの「流通回路の外」という定義にもかかわらず死蔵されることのないという特質――「囲い」の「統一性」と「全体の中での知覚」という視点は、鈍翁と茶と美術品の関係を的確に言い当てている。

特定の事物への関心は事物の配置方法に直ちに移行する。この点についてポミアンは次の如く述べる。

こうした趣味の変化、あるいはより正確にいえば芸術・歴史的関心の移動はすべて、意味つまり価値を与えられた品物の全体を変化させたばかりではなく、それらを展示する枠組と展示のやり方の原則をも変化させた。

文化的タイプとしての個人蒐集家の出現は、室内空間の整備におけるひとつの改革をともなっている。……十六世紀以来、こうした役割は庭園（……）や中庭の壁、および、場合によっては建物正面の壁（そこには胸像や浅浮き彫りや碑文がはめ込まれた）にも与えられる。その後になって画廊（ギャラリー）が出現する。（同書三八七頁）

私はかって（一九九四年）「展示の詩学と政治学」というワシントンのスミソニアン博物館で行われたシンポジウムで「伝統日本における展示の詩学」という発表を行った。その中で日本における公共の博物館の成立は明治二十年代の帝室博物館の成立以後であるとし、それ以前は、むしろ興行的な空間がその役割を果たしていたと説いた。木下直之氏の「美術という見世物」（平凡社）も、明治以降の日本の公共の展示が見世物空間で成立した事を論じた。

とは云うものの益田孝における茶会の空間を検討するに及び、それが殆んど私的なものであるが、ヴェネツィアにおける画廊成立と同じような前提を満たしていることに気がついた。鈍翁がつくり上げたのは茶道の名のもとに作られた展示空間であった。しかも益田孝、克徳、英作の三人の兄弟は世間から「益田の鏡餅兄弟」と呼ばれた。この三人は茶道、古美術蒐集という趣味を共有し、互いに影響し合っていた。先述のように、益田孝は一八六三年（文久三）の幕府の遣欧使節団に偽名を使ってもぐり込んで、父鷹之助と共に渡航している。克徳は二十一歳の時（明治五年）、岩倉使節団の追加派遣員として米国、ヨーロッパへ向けて発ち、一八七三年に帰国した。末弟英作は明治十年（一八七七年）十三歳の時、十二月十七日出国し、英米仏に滞在し五年後の一八八二年十二月一日に帰国している。克徳は東京海上保険の支配人をつとめていた折、欧米保険業務視察のため、一八九五年（明治二十八）五月十九日に横浜を出発し、ニューヨークを経てロンドンに至った。その帰路、カルカッタの古物店で布を買い同年中に持ち帰った。当時カルカッタはアジアで最も重要な植民地都市で、ロンドン駐在の駐英大使に任じられる前に

カルカッタの総領事になるのがふつうのしきたりであった。この時克徳が買った布はインドの王の象の背に掛けたものと言い伝えられている。この布は益田間道（かんとう）（広東）と呼ばれている。この克徳は、鈍翁を茶道に引き込んだ張本人で、茶室の設計や作庭でも才能を発揮したと云うから、柏木貨一郎を孝に引き合わせた人間ということになるだろう。

一方、父鷹之助は大蔵省退職後、二十年以上にわたりキリスト教の布教に携ったと云う。山中共古と親しいところから見るとメソディスト派であったと思われる。山中共古や坪井正五郎らの「集古」の会に孝が賛助会員として加わったが、その背景にはこうした事情があったのかも知れない。

末弟英作は一九二一年（大正十）二月二日に世を去った。築地本願寺に埋葬された。一八九三年（明治二十六）八月三十一日、三井物産の香港支店長を命じられるが病気を理由に退職してしている。二十九歳のときである。その十年後（一九〇三年、明治三十六）に、英作は三井物産の依頼でタイ国に軍銃受け渡しと次年度の納品交渉のため同国に滞在している。

英作は一九〇六年（明治三十九）東京日本橋に美術品販売商「多門店」を開業した。

柏木貨一郎の最後についてはすでに触れたところであるが、没後益田家での柏木の記憶については高橋箒庵の「万象録　高橋箒庵日記巻一」（思文閣京都　昭六一）に次のような記録が載っている。

〔白紙庵の茶客〕

正午の茶客は益田孝、朝吹英二、益田英作、山澄力蔵、梅沢安蔵にて、何れも今度の追養の主人公益田克徳

と骨肉若くは親友の間柄なれば、故人に関しての懐舊談あり。中にも今度使用したる克徳氏手造銘不出来の茶碗は、故柏木貨一郎が焼卸し当時五十圓にて克徳より譲受けたる者にして、彼の節倹家の柏木が無類の傑作なるべしと云う。夫れより談柏木氏に及び、明治時代に在て其身分の割合に柏木氏程多く名器を収蔵したる者なく、確に大好事家と稱す可きなれば来年四月松平直亮伯爵家にて不昧公百年忌大会終了後、御殿山益田邸に於て柏木氏の追善会を催して其遺品を陳列すべしと云ふに評議一決して、来春道上に一段の光彩を放つべき一動機の此茶席中に成立ちたるは尤も喜ぶべき事なり。

また、当時のコレクター達が既に学芸員養成のための大学建設まで射程に収めていたというのは驚くべきことである。「東京日々」の明治二十七年八月三十日の条は次のように伝えている。

本会は豫て報じた如く、府下有名の美術奨励家の発起成立せるものにして本邦美術の技能将来大家となる望みあるもの、或は美術的考案又は鑑識等の才能ある青年輩を選んで育成し、以て美術の発達を永遠に謀る目的にして、其の発起会は屢々開きたるが、来月八、九日頃を期し、有楽町なる三井集会所に於て其の総会を開くと云ふ。

と云うことは柏木貨一郎の設計した三井集会所において行われていたので、柏木が半ば公的に三井が共有する趣味的世界のリーダーシップを持ってもいたこと意味するものである。

更にこの美術育英会の組織については次のような人々の名が挙げられている。

而して同会組織の委員は平山成信、河瀬秀治、岡倉覚三、三井八郎衛門次郎、原六郎、三野村利助、鈴木利亭、益田孝、益田克徳、末倉一平、馬越恭平、森村市左衛門、村山龍平（朝日新聞社主）、山東直砥、小室信雄の

諸氏にして（傍点は三井関係者）、其商議委員会は（絵画部附図案）下条正雄氏外六氏。（図案）平山英三氏外六氏。（牙木彫刻部）高村光雲氏外四氏。（金属彫刻部）今村長賀氏外四氏。（漆工部）池田泰眞氏外四氏。（陶工七宝部）濤川惣助氏他四氏。（建築部）柏木貨一郎氏外四氏。（考證部）黒川眞頼氏外八氏なり。

ということはこの明治二十七年には和風建築は三井の本流を占め柏木が設計の中心にあり、一方、横川民輔が既に辰野金吾の指導を経て三井本店に入り、明治二十五年に総本店の新築を担当していたから、三越の建築も変換期に入っていたのであった。

明治三十一年九月の「国民新聞」に次のような死亡記事が掲載されている。

柏木探古翁　○考古社会の生きた字引として、絵画彫刻、刀剣製磁より遊芸百般の末に至る迄、殆んどつくさざるなき頭脳を有し、而して之を組織し、分類し、運用して、鑑識の才近代に罕なりと稱せらる柏木貨一郎氏は、去る五日王子澁澤氏の別荘へ赴かんとし、誤って汽車にふれ、六日の午前九時白玉楼中の人となりぬ。学、萬屋的なりと云、行ひ、幇間的とそしらばそしれ、然か〳〵雑博なる知識を然か〳〵剪裁して、隠然美術界に重きをなせしは、とにかく当代の一才人たるを失はざる可く、過渡の時代にある現美術界の為めには、是非共なくならぬ材なりしに、今や乃在らず、惜しみても尚餘りある事と云べきなり。（「明治新聞集成」明治三十一年九月）

この記事は、柏木貨一郎の明治文化精神史における位置を余すところなく示している。大学及び博物館が知のヒエラルヒーの確立のために充分に機能していない時期における碩学の位置をこれ程生々として示している文章は少

ない。益田家の茶会がこのような頭脳を基礎として行われ、それが美術館のプロトタイプを形成していたことは、文化の中心と周縁が最も近接した時期の問題の所在、中心と周縁は入れ替え可能であったことを如実に示している。

終論

私は寡聞にして柏木にはその名を冠した著作は「絵巻物番付」以外に無いものと思い込んでいた。所が大川氏が国会図書館で調べた結果として次の如き著作を挙げている。

「集古印史」（天皇御璽などの古印を集めたもの）

「東大寺物価食功上下」

「幕府御殿勘定出納録」

黒川直頼との共著「工芸志料巻七」蒔絵の部

「書き留めの手帳」数冊（安田善次郎の所蔵になるもので香取秀真の「日本板金史」に触れられているが、現在は所在不明。安田の蔵書の大半が関東大震災で焼失したところから推して考えると、写本でも無いかぎり残存の見込みは少ない。大川氏は古銭のほか支那の尺度に関する覚書が纏められていると書いている。

本稿で筆者は柏木貨一郎と云う人物が演じた役回りを追ってみた。彼は幕府の大工の棟梁とも云うべき小普請頭という形で家を継いだが維新に際して職を離れた。明治になって四年の招魂社の共進会に加わって多数の古物の出品を認められて、町田久成等々に認められて博覧会事務局に勤めた。どちらかと云えば黒子的存在であった。同じ事は「竜池会」についても云える。

明治十二年頃から益田克徳の示唆で茶事を学んだ。その後は益田孝の古美術収集の友、助言者としての日々を送った。斯うして隠れもなき古美術の収集鑑賞の大家となった。正倉院の調査には、明治五年、八年に参加し、古代の美術に対して尽きることない情報の収集、鑑定家としてみとめられるに至った。

彼の仕事の一つに絵巻物を中心にした古美術の番付があるが、その知識と射程の広さにおいて竝ぶ者の無いことを想わしむるところがある。

更に彼は古銭学に通じ、その点で福地桜痴、守田宝丹などと相竝ぶ存在であった。山中共古とも親しく、根岸を中心とした大槻如電の如き文人、根岸武香の如き考古家と繋がり坪井正五郎、山中笑らの作った集古会とも繋がりがあった。又田口卯吉の歴史研究誌とも関係を持ち、古代史で寄与もあった。事実彼は寺社の史料を自ら駆使した最初の古代史家であった。

柏木が出品した古美術で観古美術会目録に掲載されているものに次の如き作品がある。

第二回　「古瓦硯」（明治十四年五月十七日刊、編集兼出版人、龍池会会員、有隣堂）
「山陽批評唐宋八家文二帙」（柏木徳兵衛名義）
「白磁香炉」（明治十五年）
第三回　「南方天眷属木像」
「北方天眷属木像」
「薬師十二神将木像」
「西方天眷属木像」

つまり柏木の存在は江戸時代の集古家の伝統を、明治初期の博物館を通して、本人は明治三十四年に事故死したが、昭和十九年まで続いた「集古」という民間の豊かな学問の鉱脈に繋いだことにあると云えよう。コレクションから博物館、美術館に至る歴史を再構成するとき、この人物の偉大さが改めて確められるであろう。

付記

本稿の成立のきっかけは五島美術館で昨年十二月開催された「鈍翁の眼」展に掲載された鈴木邦夫氏の「鈍翁のコレクションのアルケオロジー」であった。経済学者である鈴木氏がこの分野の視野を拡大させたことは驚嘆に値すると考え、氏の勤務先東京電気通信大学に訪れ、教えを乞うたところ、氏は惜しみなく資料を提供して下さったことに限りない感謝の念を表したい。鈴木氏がコピーして下さった大川三雄氏「工匠・柏木貨一郎の経歴とその史的評価について」には建築史の裾野の急速な拡大について教えられた。又「三井の集会所」を恵贈下さった石田繁之介氏の寛大な学的友情を異分野の人間に注いで下さった点にお礼を申し上げたい。横川洋子さんには民輔関係の資料を提供していただいた。併せてお礼の言葉を連ねたい。

＊本稿は、一九九八年度札幌大学研究助成制度による研究成果の一部である。